

MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY
ANNUAL REPORT
OF
RESEARCH INSTITUTE FOR LINGUISTIC
CULTURAL STUDIES
Vol.21 DEC, 2009

Contents

What can be Seen from Modern Japanese

Hideo SATAKE

Chiaki KISHIMOTO

the Telops on the television program "Kohaku Utagassen" in the
last 30 years -from the 1960s to the 1980s-

Kaoru SHITARA

武庫川女子大学

言語文化研究所年報

第二十一号

二〇〇九

武庫川女子大学
言語文化研究所年報

第 21 号

2009

武庫川女子大学 言語文化研究所年報 第 21 号

目 次

言語文化研究所の活動の概要	1
---------------	---

現代のことばから見えてくるもの 2	
-------------------	--

佐竹 秀雄・岸本 千秋	5
-------------	---

■新聞の語彙

1997年の漢字—社会面からみた世相を表す漢字—	7
新聞第一面の語彙	12
新聞社会面の語彙	17
新聞経済面の外来語—新聞 4 紙を資料として—	23

■教育とことば

愛される漢字、嫌われる漢字	29
けいごのご	35
話しことばの将来	41

紅白歌合戦に見る30年間の文字テロップ	
---------------------	--

—1960年代から1980年代—	設樂 馨	47
------------------	------	----

言語文化研究所活動の概要

1. 2009年度の調査研究

(1) マスコミ報道の表現と表記に関する調査研究

この研究の目的は、マスコミ報道で使われていることばを調査することによって、日本語における問題点を探ることにある。マスコミで使われることばは、一面では一般の日本語の姿を映すと同時に、また、一般に対する影響力も大きい。マスコミにおける言語使用の実態を調査研究することによって、日本語の現状を考える基礎データを得ようとするものである。

今年度は、ペットを扱った雑誌を調査した。代表的なペットといえるいぬとねこの飼い主は、どのようなことばで愛犬・愛猫をえがいているか、という視点で調査分析を行った。その結果については、LC りぼーと30号で「ねこ派の文章 vs. いぬ派の文章」というタイトルで報告した。

2. 2009年度の刊行物等

(1) 言語文化研究所年報第20号

前年度（2008年度）における研究成果の報告として、以下の論文・資料を掲載して刊行した。

岸本千秋：「食べ物」に関することばの時間的变化

－アンケート調査の結果から－

設楽 馨：テレビ視聴態度と文字テロップ

－学生と成人の対比－

佐竹秀雄：新聞投書欄の新聞社別語彙比較

(2) 研究レポート（LC りぼーと）29号・30号

2009年度に行った研究会、セミナーなどのイベントについての報告と、ペッ

トを扱った雑誌をもとにしてのことばの調査結果とを報告した。各号のタイトルと内容は次の通り。

第29号：2009年度 イベントあれこれ

2009年は、例年に比べてイベントが多かった1年であった。研究所が、2009年に開催したり、開催の準備にかかわったりした、それぞれのイベントについて報告している。

3 ページに訂正箇所あり。

【訂正】（誤）西宮市立西宮今津高校 （正）兵庫県立西宮今津高校

第30号：ねこ派の文章 vs. いぬ派の文章

雑誌『ねこのきもち』、『いぬのきもち』（2009年4月号～12月号、ベネッセコーポレーション発行）の読者投稿欄を対象として分析を行った。読者投稿欄は、いわば、愛猫家と愛犬家の「うちの子自慢」とも言えるが、いくつかの投稿文に目を通していううちに、ねこ派といぬ派とでは、どうも文章の書きように違いがありそうだ、という直感が調査の出発点となった。愛猫家は、飼う猫の「動き」を自慢し、愛犬家は飼う犬の「ありさま」を自慢していることが浮かび上がった。それが、文章を読んだときの印象の違いに現れていたのである。

3. 言語文化セミナーの開催

2009年11月28日（土）に「言語文化セミナー」の拡大版を開催した。今回は、第21回「ことわざフォーラム」で、ことわざ学会との共催であった。午前中は、研究発表が2件と学会の総会があり、午後は、研究発表3件とシンポジウムが行われた。

シンポジウムのテーマは「ことわざの多様性」。ことわざは、意味の相反することわざが存在したり、複数の解釈が可能なことわざが存在したりする。また、ことわざがカバーする領域も、天気、農業・漁業から処世術まで広範囲に及ぶ。さらには、ことわざを使う目的も、他人の評価・皮肉・批判・説得や自己主張・納得など実にさまざまである。

このように多様なことわざについて、それぞれ自分の思いや考えを述べ合い、ことわざを再認識しようというのがねらいであった。

シンポジウムでは、本研究所の佐竹が司会を務めた。また、LC 倶楽部会員からの参加者が13名あった。

4. 「ことばのサロン」開催

〈「ことばのサロン」開催の趣旨〉

毎年開催している「言語文化セミナー」では、講師の話聞いて終わりというスタイルが多く、参加者からの意見を聞く時間が少ないのが現状である。質問を受ける時間がもう少しあればなおよいのと思うこともしばしばである。そこで、セミナーとは別の機会を作り、参加者に、日本語について思う存分おしゃべりをしていただく場を設けたいと考えたのが「ことばのサロン」である。

第1回「ことばのサロン」

2009年10月30日（金）1時30分～3時30分（試験的に開催）

テーマ：「人の呼び方」

申し込み：36名。当日参加者：30名。

「ことばのサロン」は、LC 倶楽部会員を中心として、ことばについて語り合う会である。2009年度は、2010年度に本格的に始動する前段階として、試験的に会を開催した。

まず、佐竹がテーマである「人の呼び方」について、人称代名詞、自称・対称・他称、呼称システムなどの概説的な話をした。呼称システムでは、「サザエさん」の家族を例に出しながら、日本における呼称の特色と法則を説明した。

その後、参加者がそれぞれの体験をもとに、その法則が当てはまるかどうか、あるいは、「家族をどのように呼ぶか」について自由に話し合った。

自分の連れ合い、兄弟、親戚をどのように呼んでいるかということから始まり、自分の子どもからどう呼ばれているか、さらに孫からはどう呼ばれているかということにも話題が広がった。

たとえば、夫婦の間では、結婚当初はお互い名前で呼び合っていたが、子どもが生まれてからは「お母さん」「お父さん」に変化した。子どもが結婚して、また二人の生活に戻った現在は、「もう一度名前で呼び合うように変えようと話し合った」という参加者もあった。

研究所内で話し合った結果、2010年度以降も同様の会を継続して行うことを決定し、そのため、研究所の予算にも「ことばのサロン」開催のための消耗品等を計上することとした。

5. 「メディアとことば研究会」テレビ会議

テレビ会議を利用した「メディアとことば研究会」の関西会場として協力をした。この研究会は、2003年3月に発足し、年4回の研究会を行っている。そのうち2回はテレビ会議の方式で、東京会場の東洋大学と関西会場の本学とを結んで行っている。

2009年度のテレビ会議は、第25回2009年6月20日（土）、第27回2009年12月5日（土）に開催された。

利用会場：関西 武庫川女子大学日下記念マルチメディア館MM-108

関東 東洋大学白山キャンパス3号館1階ナレッジスクウェア

6. 事務報告

(1) 組織

所 長：佐竹 秀雄（文学部日本語日本文学科教授）

助 手：岸本 千秋（言語文化研究所非常勤助手）

現代のことばから見えてくるもの 2

佐 竹 秀 雄
岸 本 千 秋

ことばは社会を映す鏡だとよく言われる。研究所では、ここ15年にわたり、ことばを分析することで社会のありようの一端を明らかにしようと試みてきている。1994年度の創刊以来、年2回のペースで発行を続けている「LC りぽーと」がその一つであり、これは、日本語研究者やマスコミなどに向けて、ことばに関する話題を提供するという役目も担っている。

「LC りぽーと」は、B4サイズの用紙二つ折の表と裏に、ことばのもつ面白さや、ことばに対する人々の意識などを盛り込んで学内外に発信してきたリーフレットであり、現在30号まで発行している。

過去、「LC りぽーと」に取り上げた題材はさまざまであり、2004年には、『言語文化研究所年報』第15号として大きく3つのテーマに分けてまとめたものを発行した。それは、「LC りぽーと」創刊10周年とともに、言語文化研究所開設15周年の記念としてでもあった。

本号では、『言語文化研究所年報』第15号で取り上げられなかったものを、新聞の語彙調査結果として「新聞とことば」、漢字や敬語など学校教育とも関連するものを「教育とことば」として、2つのテーマにまとめている。

1997年の漢字

—社会面からみた世相を表す漢字—

(LC りぼーと 8 1998年 2月)

ここ数年、日本漢字能力検定協会が、その年の世相を表す漢字を、一般の人々から公募しています。そして、昨年末にも、1997年の結果を発表しました。それによりますと、1位は「倒」で、2位「破」、3位「金」が続き、金融破綻とつながりの強い漢字が選ばれていました。

これらは、一般の人々の意識に基づいた結果として選ばれたものです。そこで、私どもでは、意識の観点とは別に、もう少し客観的な観点から一年を表す漢字が探せないかと考えてみました。そこで、世相を写す鏡とも言われる新聞を取り上げて、紙面に多く使われた漢字を調べることにしました。朝日、毎日、読売の新聞3紙の社会面に1年間に出現した漢字の調査をしたのです。その結果について報告します。

◆調査の方法

朝日、毎日、読売の新聞3紙（各社大阪本社発行）の社会面について、1997年1月～12月の休刊日を除くすべての日の朝刊から、各日5文を無作為抽出した。そのデータを、機械可読のテキストデータとして入力した。そして、プログラム処理によって、使われている漢字を調べた。

データは、322日分で4,830の文である。そこに含まれる漢字は、

延べ：153,396字

異なり：2,112字

であった。

◆最も多かった漢字は？

個々の漢字について、出現度数の多いものから順に並べたものが表1であ

る。カッコ内の数値は出現率を表し、単位はパーミル（千分率）である。

表1 度数順漢字表

順位	漢字	度数	(パーミル)	順位	漢字	度数	(パーミル)	順位	漢字	度数	(パーミル)
1	日	2,124	13.8	18	社	927	6	35	九	647	4.2
2	十	1,691	11	19	五	899	5.9	35	地	647	4.2
3	人	1,681	11	20	月	896	5.8	37	円	644	4.2
4	一	1,656	10.8	21	本	867	5.7	38	業	631	4.1
5	大	1,444	9.4	22	中	847	5.5	39	内	615	4
6	者	1,408	9.2	23	阪	820	5.3	40	件	608	4
7	二	1,399	9.1	24	四	809	5.3	41	見	594	3.9
8	市	1,391	9.1	25	行	781	5.1	42	搜	589	3.8
9	事	1,388	9	26	県	775	5.1	43	前	582	3.8
10	年	1,313	8.6	27	員	743	4.8	44	上	577	3.8
11	同	1,236	8.1	28	時	735	4.8	45	府	572	3.7
12	会	1,187	7.7	29	出	733	4.8	46	調	562	3.7
13	疑	1,155	7.5	30	後	717	4.7	47	取	551	3.6
14	三	1,046	6.8	30	分	717	4.7	48	生	545	3.6
15	長	1,017	6.6	32	査	702	4.6	49	入	543	3.5
16	部	987	6.4	33	金	693	4.5	50	発	542	3.5
17	容	959	6.3	34	約	665	4.3	50	万	542	3.5

表1では、紙面の都合で50位まで掲げた。最も多かったのは「日」で、それに「十・人・一・大」と続く。これらは、新聞の漢字調査で常に上位を占める漢字である。漢数字で7位に「二」、14位に「三」があるが、これは、1位「日」、2位「十」、4位「一」とともに、日時が重要な情報の要素である新聞では当然の結果である。

新聞の漢字調査で常に上位を占める漢字に交じって、やや違和感のある漢字が見られる。13位の「疑」である。これは「疑う」と使われることが多いのではなく、6位の「者」、17位の「容」とともに「容疑者」として使われることが多く、そのために上位にランクインしたものである。調査対象が新聞の社会面であることによるものであり、同時に、社会面が犯罪事件を多く

報道している事実を示すものでもある。

また、表1に、「阪」「県」「府」があって「都」がないのは、大阪本社発行の新聞であって、社会面が一面などとは違って、比較的ローカル色が強いために生じた現象であろう。

なお、一般の人々の公募で世相を表す漢字に選ばれた「倒」は、度数42で687位であった。また、「倒」に続く「破」は、度数63で522位、「金」は、表1にもあるように、度数693で33位であった。

◆1997年にちなむ漢字

ところで、「日」が多かったといっても、前述のように、新聞ならば常によく使われる漢字であって、1997年の新聞に特徴的な漢字というわけではない。そこで、1997年にちなむ漢字を取り出すことを考えてみる。

そのために、「出現度数が多かった漢字」で、「いつでも上位を占める漢字の常連でない漢字」を求めることにする。まず、

- (1) 1月～12月の各月において、上位100位までに含まれる漢字を求める。
- (2) それらの漢字それぞれについて、次のA、B、Cの値を求める。
 - A 上位100位までに含まれたのは何か月か？
 - B 上位100位までに含まれた月における総出現度は？
 - C 上位100位までに含まれた月における比率の平均は？

結果をCの値の大きい順に並べると、次の表2のようになる。表2で、「出現月」「度数」「月平均比率」が、それぞれ上記のA、B、Cに当たる。

表2は、表1とほとんど変わらない。そして、上位の漢字は、やはり12か月にわたって出現している。ところが、25位の「油」は、100位位内に含まれていたのは1か月だけである。これは、「油」が、ある1か月に集中的に使われたことを意味する。その1か月とは、実は1月で、重油流出事故や石油卸商がかかわる事件が起こった月である。これらの事故や事件の報道で、「油」が多く使われたのである。

また、31位の「少」は、7月の1か月だけ100位以内に含まれたものである。これは、神戸の児童連続殺傷事件で逮捕された容疑者が少年であったので、

表2 月別ランク100位以内の漢字の集計表

順位	漢字	出現月	度数	月平均比率	順位	漢字	出現月	度数	月平均比率	順位	漢字	出現月	度数	月平均比率
1	日	12	2,124	13.9	16	部	12	987	6.5	31	少	1	61	4.8
2	十	12	1,691	11	17	容	12	959	6.3	32	後	12	717	4.7
3	人	12	1,681	11	18	社	12	927	6.1	32	分	12	717	4.7
4	一	12	1,656	10.8	19	五	12	899	5.8	34	査	12	702	4.6
5	大	12	1,444	9.4	20	月	12	896	5.8	35	金	12	693	4.5
6	者	12	1,408	9.2	21	本	12	867	5.7	36	約	12	665	4.3
7	二	12	1,399	9.1	22	中	12	847	5.5	37	業	11	602	4.3
8	事	12	1,388	9.1	23	阪	12	820	5.3	38	九	12	647	4.2
9	市	12	1,391	9	24	四	12	809	5.3	39	地	12	647	4.2
10	年	12	1,313	8.6	25	油	1	66	5.2	40	円	12	644	4.2
11	同	12	1,236	8	26	行	12	781	5.1	41	件	11	582	4.2
12	会	12	1,187	7.8	27	県	12	775	5.1	42	内	12	615	4
13	疑	12	1,155	7.5	28	員	12	743	4.9	43	捜	11	564	4
14	三	12	1,046	6.8	29	時	12	735	4.8	44	見	12	594	3.9
15	長	12	1,017	6.6	30	出	12	733	4.8	45	組	6	293	3.9

紙面に「少年」という表現で書かれることが多かったり、「少年法」改正をめぐる話題が報道されたりしたことで、7月に出現頻度が高くなったのである。

◆紙面をにぎわした漢字

このように、12か月を通してではなく、短期間に出現頻度が高いものを求めると、その当時の報道内容、つまりは、いわゆる「世間をさわがせた事故や事件」と結びつきの強い漢字が得られる。そこで、表2の基になったデータについて、(3)「出現月」が4以下のものだけを、上位から抜き出す。それが、表3である。

1位「油」、2位「少」は先に説明した。3位の「海」は、1月の日本海で重油が流失した事故のために多くなっている。4位の「殺」は、殺人事件や子供の自殺が相次いだ5月と、神戸の児童連続殺傷事件のあとの7月に多

表3 月別ランク100位以内が4回以下の漢字

順位	漢字	出現月	度数	月平均比率	順位	漢字	出現月	度数	月平均比率	順位	漢字	出現月	度数	月平均比率
1	油	1	66	5.2	11	船	1	41	3.2	21	収	2	80	3
2	少	1	61	4.8	11	力	1	41	3.2	22	口	3	112	3
3	海	1	50	3.9	13	代	3	129	3.2	23	神	4	148	3
4	殺	2	91	3.8	14	病	4	160	3.2	24	券	2	73	3
5	総	1	47	3.6	15	公	2	78	3.2	25	供	2	72	3
6	重	1	46	3.6	16	医	1	40	3.1	25	資	3	108	3
7	車	4	186	3.6	17	回	2	77	3.1	27	犯	1	35	3
8	億	1	43	3.4	18	都	2	76	3.1	28	故	1	37	2.9
9	税	2	90	3.3	19	君	1	37	3.1	29	村	2	75	2.9
10	淳	1	39	3.3	20	側	1	38	3	30	戸	2	70	2.9

かった。5位の「総」は、総会屋に対する利益供与事件が発覚した9月で、「総会屋」「総務」「株主総会」などの語が使われたために「総」の頻度が高かった。6位の「重」も「重油」で1月。

結局、新聞の社会面では、1月の重油流失の事故にかかわる漢字が多かった。一般の人々が選んだ金融破綻に関連する漢字は、社会面の調査ではほとんど浮かんでこなかった。社会面は日常のさまざまな出来事を具体的に伝えるものであり、人々は、そうした出来事を抽象化してイメージをとらえようとするからであろう。

〔作業協力者〕 今井博子・岡本典子・重田久美子・内藤裕美・長岡阿紀・
中野佳代子・中尾美也・西野まゆみ・堀畑あかり

新聞第一面の語彙

(LC りぼーと10 1999年2月)

昨年発行の『LC りぼーと Vol. 8』では、1997年の新聞社会面（いわゆる三面記事）に出現した漢字についての漢字調査の結果を報告しました。その結果は、重油流出事故や石油卸商にかかわる事件に関する「油」、また、神戸の児童連続殺傷事件の容疑者が少年であったための「少」など、社会面で大きく取り上げられた事件が漢字に反映されていました。今回の調査対象は同じく1997年の新聞の第一面のデータです。その語彙調査の結果について中間報告をします。

◆調査の方法

朝日、毎日、読売の新聞3紙（各大阪本社発行）の第一面について、1997年1月～12月の休刊日を除くすべての日の朝刊から、各5文を無作為抽出した。そのデータをテキストデータとして入力し、プログラム処理によって、使われている語彙を調べた。自立語だけを対象とし、助詞、助動詞は含めない。語彙は短単位データである。

データは、353日分で5,295の文である。そこに含まれる語彙は次の通りであった。

延 べ：125,725語

異なり：11,766語

◆語彙表

出現度数の多い語彙から順に並べたものが表1である。複数の読みが可能な語彙にはできるだけ読みをつけるようにし、漢語は片仮名、和語は平仮名で示している。語種については、和語（W）、漢語（K）、外来語（G）、混種語（M）及びその他（-）の5分類とし、その他は「日本国内の地名・人

新聞第一面の語彙

表 1 度数順語彙表

順位	語彙	語種	度数	%	順位	語彙	語種	度数	%
1	する	W	6,418	51	51	化	K	247	2
2	いる	W	2,081	16.6	52	時(ジ)	K	246	2
3	日(ニチ)	K	1,021	8.1	53	その	W	244	1.9
4	こと	W	957	7.6	54	側	W	243	1.9
5	一	K	904	7.2	55	総会	K	236	1.9
6	年(ネン)	K	893	7.1	56	府	K	230	1.8
7	ある	W	726	5.8	57	捜査	K	227	1.8
8	なる	W	716	5.7	58	東京	—	222	1.8
9	者	K	681	5.4	58	利益	K	222	1.8
10	九	K	673	5.4	60	事業	K	219	1.7
11	二	K	642	5.1	61	会社	K	216	1.7
12	人(ニン)	K	614	4.9	62	もの	W	214	1.7
13	五	K	575	4.6	63	方針	K	210	1.7
14	十	K	570	4.5	64	後(のち／あと)	W	208	1.7
15	日本	K	550	4.4	65	みる	W	207	1.6
16	的	K	533	4.2	66	委員	K	200	1.6
17	四	K	530	4.2	67	改革	K	199	1.6
18	円	K	482	3.8	68	分	K	197	1.6
19	三	K	471	3.7	69	会議	K	196	1.6
20	いう	W	449	3.6	69	社	K	196	1.6
21	六	K	440	3.5	71	保険	K	194	1.5
22	よる	W	439	3.5	72	首相	K	191	1.5
23	二十	K	413	3.3	72	性	K	191	1.5
24	ため	W	407	3.2	74	くる	W	190	1.5
25	市	K	377	3	75	おり	W	187	1.5
26	月(ガツ)	K	367	2.9	75	受ける	W	187	1.5
27	1	—	363	2.9	77	取引	W	182	1.4
28	会	K	362	2.9	78	大(ダイ)	K	180	1.4
29	証券	K	352	2.8	79	できる	W	178	1.4
29	省	K	352	2.8	80	後(ゴ)	K	175	1.4
31	容疑	K	344	2.7	80	金融	K	175	1.4
32	事件	K	333	2.6	82	調査	K	174	1.4
32	八	K	333	2.6	83	銀行	K	173	1.4
34	七	K	327	2.6	84	これ	W	171	1.4
35	日(か)	W	319	2.5	85	求める	W	167	1.3
35	約	K	319	2.5	86	区	K	165	1.3
37	同	K	310	2.5	87	案	K	164	1.3
38	億	K	309	2.5	87	供与	K	164	1.3
39	党	K	302	2.4	89	代表	K	163	1.3
40	部	K	299	2.4	89	屋(や)	W	163	1.3
41	この	W	296	2.4	89	間(カン)	K	163	1.3
42	県	K	286	2.3	92	午後	K	162	1.3
43	政府	K	283	2.3	92	第	K	162	1.3
44	問題	K	279	2.2	94	示す	W	161	1.3
44	ら	W	279	2.2	95	元	W	160	1.3
46	2	—	278	2.2	95	報告	K	160	1.3
47	対する	M	273	2.2	95	本部	K	160	1.3
48	大阪	—	264	2.1	98	所	K	157	1.2
49	国(コク)	K	256	2	98	長	K	157	1.2
50	関係	K	253	2	100	朝鮮	K	155	1.2

名等の固有名詞及びアラビア数字」に限った。したがって、固有名詞でも「パリ」「ダイアナ」などは外来語として扱い、漢数字の「一」～「十」については漢語と認定した。出現率はパーミルで表す。

表1では、紙面の都合上100位までを掲げた。最も多かったのは「する」で、それに「いる、日（ニチ）、こと、一」と続く。これらは、新聞の語彙調査なら常に上位を占める語彙である。今回調査の特徴的な語彙と思われるものとしては、29位の「証券」、55位の「総会」、58位の「利益」、87位の「供与」、そして89位の「代表」「屋」などが挙げられよう。これらは証券会社が総会屋に利益供与をしていた事件に関係するものである。また、省（29位）、党（39位）、政府（43位）、首相（72位）、金融（80位）、銀行（83位）などは政治・経済にかかわる語彙であり、第一面の特色を表している。東京（58位）より、大阪（48位）の方が上位に入っているのは、大阪本社発行の新聞ということで、地元に関連する記事の多さが影響していると考えられる。

◆語種別使用率

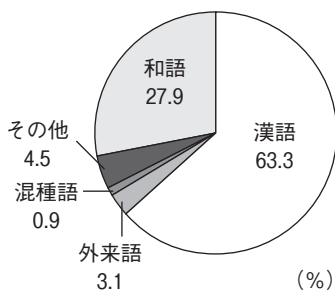


図1 延べ語

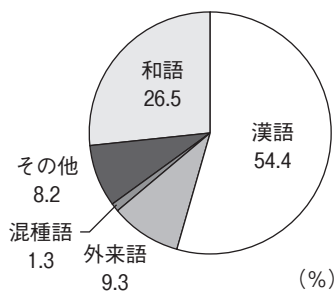


図2 異なり語数

語彙の語種別比率を示したものが図1、2である。図1が延べ語数、図2が異なり語数である。

ここで、まず注意を引くのは、漢語の使用率の高さである。延べも異なりも、和語に比べて2倍以上になっている。

過去の調査、例えば、国立国語研究所の雑誌調査¹⁾では、異なりでは和語（36.7%）より漢語（47.5%）の方が高いが、延べでは逆転して、和語が

53.9%で漢語が41.3%である。それと比べてみても、今回の調査では漢語の使用率が非常に高いことが大きな特徴であるといえよう。

次に、外来語は延べ語数3.1%、異なり語数9.3%であった。一番多く使用された外来語が「グループ」(147位／度数112)で、「パーセント(%)」、「アジア」と続いている。先の雑誌調査(41年前のデータ)では、延べ2.9%、異なり9.8%であるから、当時とさほど大きな差はない。この二、三十年、外来語が大きく増加しているだろうという一般的な推測は、第一面に関してはあてはまりにくいようである。

その他は先にも述べたように「日本の固有名詞及びアラビア数字」である。調査時では、毎日が日時、年齢、数量などをすべてアラビア数字で表しているのに対し、朝日と読売はそれらを漢数字で表している。この毎日の表記方式は近年のやり方であり、以前ならばもっと漢数字が多かったことになり、それに応じて漢語の比率がさらに高くなっていたと考えられる。それはとにかく、新聞における数字の重要さは大きく、表1で、アラビア数字と漢数字を合わせると、50位までに13語も占めている。

◆外来語とその他

最後に、外来語とその他について度数の高い上位20語を示しておく。()内は全体の順位である。

〈外来語〉		〈その他〉	
1. グループ(147)	11. ガス(633)	1. 1(27)	11. 京都(218)
2. %(165)	12. テレビ(633)	2. 2(46)	12. 6(224)
3. アジア(299)	13. ケース(694)	3. 大阪(48)	13. 7(228)
4. メートル(332)	14. ガイドライン(736)	4. 東京(58)	14. 野村(240)
5. ロシア(354)	15. ホテル(736)	5. 小池(109)	15. 8(253)
6. ペルー(380)	16. ウラン(814)	6. 3(125)	16. 橋本(259)
7. キロ(401)	17. カンボジア(18)	7. 4(128)	17. 須磨(263)
8. ドル(420)	18. ホーム(918)	8. 神戸(134)	18. 0(285)
9. システム(457)	19. レベル(918)	9. 5(157)	19. 兵庫(293)
10. センター(505)	20. エネルギー(1022)	10. 9(218)	20. 沖縄(304)

1) 国立国語研究所報告25『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 分析』(秀英出版、1964年)

外来語では基本的でなじみの深い語彙が上位に入っている。

その他では当時の首相の名（橋本）より、世間を騒がせた人物の名（小池）の方が上位にランクインしているのが興味深い。また、神戸市須磨区での児童連続殺傷事件は、関西地方の事件ということもあってか、第一面で頻繁に取り上げられている。

新聞社会面の語彙

(LC りぼーと12 2000年3月)

1999年発行の『LC りぼーと Vol.10』では、1997年の新聞第一面を資料として、語彙調査の結果を報告しました。証券会社の利益供与事件に関係する語彙が上位に入っていることや、政治・経済にかかわる語彙が上位にランクインしているなど、第一面の特色が表れていました。また、漢語使用率の高さは、雑誌などと比較しても、その異質さが明らかだという結果でした。

今回の調査対象は1998年の新聞で、社会面をデータとしたものです。『Vol.10』で扱った第一面と、今回調査した社会面とでは、その結果に差があるのかどうかといった点にも目を向けながら中間報告をします。

◆調査の方法

朝日、毎日、読売の新聞3紙（各大阪本社発行）の社会面において、1998年1月～12月の休刊日を除くすべての日の朝刊から、各5文を無作為抽出した。そのデータをテキストデータとして入力し、プログラム処理によって、使われている語彙を調べた。自立語だけを対象とし、助詞、助動詞は含めない。語彙は短単位データである。

データは、353日分で5,295の文である。そこに含まれる語彙は次の通りであった。

延べ：99,238語 異なり：13,420語。

ちなみに第一面では、延べ 125,725語、異なり 11,766語であり、①第一面の方が、一文がやや長文である ②社会面の方が、バラエティに富んだ語彙が使用されている、といった傾向がうかがえる。

◆語彙表

出現度数の多い語から順に並べたものが表1である。複数の読みが可能な

表1 度数順語彙表

順位	語彙	語種	度数	%	順位	語彙	語種	度数	%
1	する	W	2304	23.1	51	午後	K	235	2.4
2	いる	W	1995	20	52	ため	W	233	2.3
3	者(シャ)	K	929	9.3	53	町(チョウ)	K	226	2.3
4	1	-	840	8.4	54	中(チュウ)	K	218	2.2
5	0	-	733	7.3	54	分(フン)	K	218	2.2
6	一	K	698	7	56	会	K	217	2.2
7	日(ニチ)	K	689	6.9	57	区	K	208	2.1
8	市	K	667	6.7	58	後(ゴ)	K	206	2.1
9	東(ひがし)	W	641	6.4	59	元(もと)	W	198	2
10	容疑	K	615	6.2	60	調べ	W	196	2
11	月(ガツ)	W	604	6	61	ごろ	W	193	1.9
12	年(ネン)	K	601	6	62	前(まえ)	W	187	1.9
13	人(ニン)	K	584	5.8	63	車(シャ)	K	181	1.8
14	2	-	581	5.8	64	男性	K	180	1.8
15	こと	W	580	5.8	65	関係	K	176	1.8
16	ある	W	578	5.8	66	日本	K	174	1.7
17	いう	W	550	5.5	67	金(キン)	K	172	1.7
18	さん	W	503	5	68	逮捕	K	171	1.7
19	約	K	501	5	69	員	K	166	1.7
20	十	K	493	4.9	70	みる	W	164	1.6
21	円	K	474	4.7	70	的	K	164	1.6
22	なる	W	466	4.7	70	本部	K	164	1.6
23	九	K	450	4.5	73	その	W	158	1.6
24	大阪	-	436	4.4	74	東京	-	156	1.6
25	3	-	435	4.4	74	府	K	156	1.6
26	二	K	433	4.3	76	億	K	154	1.5
27	5	-	412	4.1	76	昨年	K	154	1.5
28	三	K	410	4.1	78	疑い	W	151	1.5
29	五	K	403	4	79	おる	W	150	1.5
29	万	K	393	3.9	80	受ける	W	145	1.5
31	4	-	388	3.9	81	署	K	143	1.4
32	時(ジ)	K	356	3.6	82	所(ショ)	K	142	1.4
32	よる	W	352	3.5	83	メートル	G	138	1.4
34	9	-	338	3.4	83	部	K	138	1.4
35	事件	K	337	3.4	85	病院	K	136	1.4
36	四	K	321	3.2	86	被告	K	132	1.3
37	同	K	317	3.2	87	三十	K	131	1.3
38	6	-	312	3.1	88	側	W	129	1.3
39	ない	W	306	3.1	89	女性	K	126	1.3
40	六	K	301	3	90	対する	M	121	1.2
41	ら	W	300	3	91	大(ダイ)	K	120	1.2
42	会社	K	289	2.9	92	社長	K	119	1.2
43	県	K	279	2.8	92	職員	K	119	1.2
44	この	W	272	2.7	94	府警	K	118	1.2
44	二十	K	266	2.7	95	できる	W	115	1.2
46	七	K	254	2.5	96	市内	K	113	1.1
47	7	-	251	2.5	97	保険	K	109	1.1
47	捜査	K	251	2.5	98	計	K	108	1.1
49	8	-	241	2.4	99	市長	K	107	1.1
49	八	K	241	2.4	100	幹部	K	102	1

語彙にはできるだけ読みをつけるようにし、漢語は片仮名、和語は平仮名で示している。語種については、和語（W）、漢語（K）、外来語（G）、混種語（M）及びその他（-）の5分類とし、その他は「日本国内の地名・人名等の固有名詞及びアラビア数字」に限った。

したがって、固有名詞でも「アフガニスタン」「ソーサ」などは外来語として扱い、漢数字の「一」～「十」については漢語と認定した。出現率はパーミルで表す。

表1では、紙面の都合上100位までを掲げた。最も多かったのは「する」で、それに「いる、者（シャ）、1、0」と続く。1997年の新聞でも、上位は「する、いる、日、こと、一」など、新聞の語彙調査では常に上位を占める語であった。ただし、数字に関しては、アラビア数字ではなく、漢数字が上位を占めていた。1997年は、朝日と読売の2紙が日時や年齢などをすべて漢数字で表していたが、1998年には、読売が年齢の表記をアラビア数字に変えたため、今回の調査では、前回と逆転してアラビア数字が上位に入ったものと考えられる。

ここで特徴的な語彙は、「事件」（35位）、「捜査」（48位）、「調べ」（60位）、「逮捕」（68位）、「疑い」（78位）などがあげられる。社会面が、日々社会を騒がしている事件・事故を取り上げていることがうかがえる。また、97位の「保険」は、和歌山市園部で起きた、保険金詐欺事件に関する報道が影響を与えたものと思われる。

◆月別トピックス

次に、月ごとの特徴的な語彙をあげていく。その方法として、全体の上位300位までの語彙と、月別の上位150位までの語彙を比較して、重複しない語彙を取り出すことにする。その作業によって抽出された語彙が、世間を騒がし、頻繁に報道された事件や事故と結びつく、つまり、その月を象徴する語彙になると言える。ここでは紙面の都合上、偶数月を対象とし、事件・事故と関連が深いと思われる語彙について表す。

2月（全20語）

順位	語	頻度
1	新井	16
3	五輪	15
7	長野	12
10	接待	9
10	中学	9

- ・ **新井**将敬衆院議員が、日興証券からの利益供与事件にからみ自殺。
- ・ **長野**冬季**五輪**が開幕。
- ・ 大手企業が、検査などで便宜をはかってもらうため、官僚を**接待**。

4月（全22語）

順位	語	頻度
2	ダイオキシン	17
4	移植	16
7	施設	13
7	組合	13
7	大橋	13

- ・ 東京都江東区、北九州市、群馬県、浦和市、神戸市兵庫区など各地で、**中学生**による事件が多発。
- ・ ごみ焼却**施設**「豊能郡美化センター」で、**ダイオキシン**が発生していたことが判明。
- ・ 臓器**移植**が法律成立前に行われていたとして、医師数人が告訴される。
- ・ 明石海峡**大橋**が開通。

6月（全21語）

順位	語	頻度
9	戦	17
13	総会	16

- ・ サッカーのワールドカップ開幕。日本対アルゼンチン**戦**。
- ・ 株主**総会**が開催。

8月（全31語）

順位	語	頻度
2	毒物	22
3	青酸	19
6	ヒ素	16
7	カレー	13
7	中毒	13

- ・ 和歌山市園部での**毒物**カレー事件。
- ・ 新潟市の会社で、ポットに**毒物**が混入されていた事件。
- ・ 和歌山市園部の毒物は**青酸**ではなく、**ヒ素**による**中毒**と判明。

10月（全22語）

順位	語	頻度
1	真須美	22
2	健治	19
3	障害	16
4	診断	13
4	林	13

- ・ **林真須美・健治**容疑者が、実際よりも重度の**障害**を装い医師に**診断書**を書かせたなどとして、**保険金詐欺疑惑**で逮捕される。

12月（全21語）

順位	語	頻度
1	真須美	21
2	中島	14
4	目撃	10
5	カレー	9
6	奈良	8

- ・ **真須美**容疑者が、**カレー鍋**の近くに一人でいたことが、住人に**目撃**されていた。
- ・ **中島洋次郎**衆院議員が**受託収賄容疑**で逮捕される。

〔作業協力者〕 由良聡美・水迫千佳・森継真由

新聞経済面の外来語

～新聞4紙を資料として～

(LC りぽーと18 2003年10月)

ここ数年、外来語に関する話題がメディアでよく取り上げられています。その多くは、外来語の氾濫を危惧する声であったり、意味が分かりにくいといったりするような、おおかたが批判的なものです。そのような流れの中で、先ほど、外来語の言い換え案が国立国語研究所から発表されました。その言い換え案についても、更にまた賛否両論、さまざまな意見がテレビや新聞紙上ににぎわしています。わたしたちは、日々の生活で、外来語を目や耳にしない日はないといっていいほどですが、では、実際に使われているのはどのようなものでしょうか。今回のレポートは、新聞の経済面を調査材料として語彙調査を行い、そこに現れる外来語についての報告です。経済を報道する際に避けて通れない外来語とは一体どのようなものなのか。以下に、調査結果の一部をお届けします。

◆調査の方法

朝日、毎日、読売、日本経済の新聞4紙（各大阪本社発行）の経済面において、2000年1月～12月の休刊日を除くすべての日の朝刊から、各5文を無作為抽出した。ただし、経済面がない場合は、経済に関する事項を扱っている面（朝日－該当面なし／毎日－経済が分かる、企業が見える／読売－エコノミクス／日経－Money & Life）からデータを収集することとした。そのデータをテキストデータとして入力し、プログラム処理によって、使われている語彙を調べた。自立語だけを対象とし、助詞、助動詞は含めない。そのようにして得られた語彙データから、外来語だけを抜き出した。

◆新聞間での比較

[外来語の少ない日経新聞]

表 1

	朝日	毎日	読売	日経
日 数	311	347	352	354
全センテンス数	1,555	1,735	1,760	1,770
異 な り	852	1026	970	518
延 べ	1968	2385	2593	1329

各新聞のデータ数は表 1 の通り。G は外来語を表す。

特徴的なのは、日経新聞が異なり語数、延べ語数、1 文あたりの外来語数が他の 3 紙に比べて少ないことである。日経新聞の全センテンス数は 1,770 と最も多いのに、外来語の数は異なりでも延べでも最も少ない。1 文あたりの外来語数も 0.75 と最も少ない。

反対に外来語の数が多いのは読売新聞で、異なり語数、延べ語数、1 文あたりの外来語数のいずれをとっても、日経新聞の 2 倍近い多さである。

[外来語を多用する読売新聞]

表 2 新聞別度数表

順位	語	朝日	読売	毎日	日経
1	サービス	54	70	65	65
2	インターネット	55	78	63	31
3	グループ	48	73	51	27
4	ネット	31	31	40	33
5	システム	20	53	28	29
6	ドル	27	54	21	24
7	アジア	29	31	26	20
8	メーカー	21	41	32	8
9	ゼロ	24	15	10	37
10	パソコン	21	25	23	8
11	ガス	13	10	30	10
12	アメリカ	1	57	4	－
12	ユーロ	20	22	12	8

上位13語の新聞別出現度数を表2に示した。太字斜体は新聞別に比べてときに最多のもの。外来語が多い読売新聞に集中している。例外は、「ネット」（毎日）、「ゼロ」（日経）、「ガス」（毎日）であり、外来語の少ない日経新聞に「ゼロ」が最多登場していることは興味深い。また、「アメリカ」（読売57）が、読売新聞に極端に偏って登場しているのは、朝日・毎日・日経が、アメリカをほぼ「米」と表記しているのに対して、読売は「アメリカ」「米」の両表記を用いているためである。

◆語彙表に見る日本経済

〔ネット中心の日本経済〕

表3は、4紙を総合して出現度数順に並べたものである。紙面の都合上、上位98位までを示した。最も多かったのは、「サービス」で、度数254。その後、「インターネット、グループ、ネット」と続く。「インターネット」が2位にランクインしたのは、経済もIT関連の語を抜きにしては語れない今の時代を映していると言える。4位の「ネット」も、「ネット時代」「ネットバブル」「ネット証券」「高速ネット」「ネット配信」「ネットを通して」「ネットで商品を見て」「ネットでの取引」などのような使われ方をしており、そのほとんどが「インターネット」の略語として使われているものである。また、「パソコン」（10位）もインターネットには欠かせないものである。このようなIT関連の語は、表中では8語あり、総度数は600である。現代の経済がいかに情報を中心とした動きをしているかを、ことばが表していると言えよう。

〔バブル後遺症の日本経済〕

経済と特に関連が深いと考えられる金融関係の語では、「ドル」（6位）、「ユーロ」（12位）などの通貨単位が上位にランクインし、世界経済の中でもアメリカやヨーロッパに関連する記事が多く掲載されていることが推測できる。また、「ローン」（23位）、「バブル」（25位）など、私たちの生活に身近な語も上位にランクインしている。文中では、「バブル崩壊後」「バブル期」「バブル時代」などの使われ方をしており、十数年前にはじけた「バブル経済」

表 3 度数順語彙表

順位	語	注記	度数	国研	順位	語	注記	度数	国研
1	サービス		254	○	52	マンション		26	○
2	インターネット	IT 関連	227		56	シャープ	固名	25	○
3	グループ		199	○	56	ルール		25	○
4	ネット	IT 関連	135		58	ビル		24	○
5	システム		130	○	59	マイクロソフト	固名	23	
6	ドル	金融	126	○	59	モード		23	○
7	アジア	固名	106		59	ライバル		23	○
8	メーカー		102	○	62	メートル		22	○
9	ゼロ		86	○	63	センター		21	○
10	パソコン	IT 関連	77		63	デフレ	金融	21	
11	ガス		63	○	65	メール	IT 関連	20	○
12	アメリカ	固名	62		66	オーブン		19	○
12	ユーロ	金融	62		66	グローバル		19	★
14	ソフト		60	○	66	セラ		19	
15	エネルギー		59	○	66	メキシコ	固名	19	
16	データ		57	○	66	リサイクル		19	
16	デジタル		57		71	インフラ	金融	18	★
16	ベンチャー		57	★	71	デザイン		18	○
19	テレビ		55	○	71	ピーク		18	○
19	リストラ		55		74	イメージ		17	○
21	コスト		54	○	74	エアコン		17	
21	ポイント		54	○	74	コンビニエンスストア		17	
23	マイナス		49	○	74	スビード		17	○
23	ローン	金融	49	○	74	テーマ		17	○
25	バブル	金融	48		79	テレコム	固名	16	
26	ビジネス		44	○	79	トラック		16	○
26	リスク		44	○	81	サラリーマン		15	○
28	ナスダック	固名	42		81	タイ		15	○
29	ハイテク		40		81	ダウ	金融	15	○
30	カード		39	○	81	フランス	固名	15	
30	ケース		39	○	81	ベイオフ	金融	15	
30	ソニー	固名	39	○	81	ボーナス	金融	15	○
33	ブランド		37		81	メリット		15	
34	ソフトバンク	固名	36		81	モデル		15	○
34	ナスダック・ジャパン	固名	36		90	クレジットカード	金融	14	
34	ニューヨーク	固名	36		90	シナリオ		14	○
34	ホテル		36	○	90	ディスク	IT 関連	14	
38	ビール		35	○	90	バレル		14	○
39	トップ		34	○	93	インタビュー		13	○
39	プラス		34	○	93	タイヤ		13	○
41	シェア		33	★○	93	チェック		13	○
41	ファンド	金融	33		93	ニーズ		13	
41	ベース		33	○	93	ファッション		13	○
44	サミット		30		98	アップ		12	○
45	ゲーム		29	○	98	アナリスト	金融	12	★
45	スタート		29	○	98	インドネシア	固名	12	
45	ホームページ	IT 関連	29		98	オリックス	固名	12	
48	コンピューター	IT 関連	28		98	サウジ	固名	12	
48	ドイツ	固名	28		98	ソフトウエア	IT 関連	12	
50	インフレ	金融	27	○	98	ノウハウ		12	
50	トン		27	○	98	フィナンシャルグループ		12	
52	スーパー		26	○	98	ラウンド		12	○
52	ゼネコン		26		98	ロンドン	固名	12	
52	ネットワーク		26	○					

が、現在も経済に大きな影響を及ぼし、経済記事として取り上げられていることが分かる。また、少数であるが、「ネットバブル」や「ハイテクバブル」など、「IT 関連用語」+「バブル」といった語も経済面では使用されている。

【アメリカの影響を受ける日本経済】

国名では、上位から「アメリカ」(12位)、「ドイツ」(48位)、「メキシコ」(66位)、「フランス」(81位)、「インドネシア」「サウジ」(98位)となっていて、アメリカが最も多い。ただし、「アメリカ」は、日経新聞以外の3紙で、「米」と漢字表記が主に用いられていて、それを考慮に入れると、アメリカを表す語の出現度数は表の数以上に多いはずである。日本経済がいかにアメリカからの影響を受けているかが推し量られる。また、普段、私たちが生活する上でそれほど意識をしない「メキシコ」が、経済を報道する際には、「フランス」よりも頻繁に取り上げられている点が興味深い。

◆言い換え案の外来語

さて、冒頭で触れた、国立国語研究所が公表した外来語は、経済面にどれほど現れているのだろうか。言い換え案は、現在、第1回、第2回が公表されており、合わせて114語が取り上げられている。そのうち、今回の調査で認められたものは45語。表2では「国研」の列に★印をつけたものである。以下、出現度数9までの語を挙げると、「ベンチャー」「シェア」「グローバル」「インフラ」「アナリスト」「フォーラム」「オンライン」「コンテンツ」「シフト」「マクロ」「データベース」「ビジョン」となる。

国研の言い換え案に取り上げられた外来語は、一般の人にとって分かりにくいとされる語だという。今回の調査で出現した、114語のうちの45語(40%)という数は、決して少なくない。このことは、経済面には分かりにくい外来語が少なからず出現していることを意味している。新聞の経済面がなじみにくいか読みにくいなどと、しばしば言われるが、その原因の一つに外来語がかかわっている可能性が考えられる。

ところで、私たちは、意味のとらえにくい外来語というのは、新しく使われ始めた語だと思いがち。今回の調査で★印をつけた言い換え語のうち「ベ

ンチャー」「グローバル」「インフラ」「アナリスト」は、実際、新しいことばで、昔の新聞の語彙調査²⁾には登場していない（登場している語には○印をつけている）。

しかし、言い換え案に取り上げられた語が、すべて新しい外来語というわけではないようで、昭和41年当時の新聞にすでに出現している語がいくつかある。それらは全部で5語あり、「シェア」（41位／度数33）、「マクロ」（116位／度数10）、「ビジョン」（130位／度数9）、「ダンピング」（207位／度数6）、「リアルタイム」（390位／度数3）である。これらの外来語は、新聞で使われるようになって少なくとも37年以上経っているわけだが、その語を使うことの是非がまだ問題にされているというわけである。特に、「シェア」は、今回の調査でもよく使われていた語であるが、こういう語も言い換えを要求されるとなれば、経済記事を書くのもさぞ大変なことだろう。

〔作業協力者〕安藤彩子・千葉佳津子

2) 『国立国語研究所報告38』（国立国語研究所 秀英出版 1972年）では、昭和41年（1966年）1年分の朝日、毎日、読売3紙についての語彙調査の報告がなされている。

愛される漢字、嫌われる漢字

(LC りぼーと 6 1996年10月)

あなたは漢字が好きですか？ それとも嫌いですか？

漢字が好きで、漢字検定などを受験している人もいるでしょうし、反対に、小中学校時代の漢字の勉強が、苦い思い出となっている人も少なくないでしょう。

若者語や女子大生ことばが、新聞などでしばしば取り上げられて、話題になっていますが、それらを「話す」場面での特徴とするならば、「読む」「書く」場面で使う漢字に対しての若者の意識は、どのようなもののでしょうか。

女子大生を対象に、「漢字と仮名、どちらが好きですか？」といったアンケート調査を行い、漢字に対する意識を探ってみました。

【調査の内容】

調査対象者は、武庫川女子大学の学生で、931人から回答を得た。

調査で取り上げたことばは以下に示す10語で、漢字書きと仮名書きのどちらか好きな書き方を選んで○をつけてもらった。

- | | |
|-------------|------------------|
| ① 挨拶／あいさつ | ② …して下さい／…してください |
| ③ 五月雨／さみだれ | ④ 3月頃／3月ころ |
| ⑤ 全く／まったく | ⑥ 紫陽花／あじさい |
| ⑦ 貴方・貴女／あなた | ⑧ …申し上げる／…申しあげる |
| ⑨ 一寸／ちょっと | ⑩ 又、今度ね／また、今度ね |

そのほかに、女子大生たちは漢字とどのような接し方をしているのか、また、漢字に対してどのような意識をもっているのか、という観点でのいくつかの質問にも答えてもらった。女子大生たちは、漢字が好きなのか、嫌いなのか――。

◆漢字で書くか、仮名で書くか（その1）

先に示した10語は、社会一般で漢字と仮名と両方が使われる可能性の高いものである。それらに対して、漢字と仮名のどちらを選んだかについての結果は、次の通りであった。

《半数以上の者が「漢字の方が好き」と回答したことば》（%）

1. 申し上げる	94・8	（申しあげる	5・2）
2. 五月雨	91・5	（さみだれ	8・5）
3. 3月頃	71・1	（3月ころ	28・8）
4. …して下さい	70・0	（…してください	29・8）
5. 紫陽花	60・6	（あじさい	39・3）
6. 全く	60・4	（まったく	39・6）

「申し上げる」「五月雨」は、9割以上の高い比率で「漢字」が選ばれている。

「3月頃」の「頃」は表外字³⁾で、小中学校では学ばない漢字であり、新聞でも原則として使われていない漢字である。それにもかかわらず、漢字表記を好む人が7割以上いる。これは一般社会で現実に使われていることの反映であろうか。

また、「五月雨」「紫陽花」は熟字訓⁴⁾であるが、これらも漢字で書く方が好まれている。さらに、「申し上げる」や「…して下さい」の「上げる」「下さい」は、漢字の「上^{うえ}」「下^{した}」の意味は強く意識されないものであるが、これらも漢字で書く方が好きな人が多い。

これらから、漢字である必要のないものに対しても漢字を好む傾向が見てとれる。

3) 表外字：常用漢字表に含まれていない漢字

4) 熟字訓：「田舎（いなか）」「土産（みやげ）」のように、漢字一字ずつでは読まず、まとめて一つの訓として読むもの

《半数以上の者が「仮名の方が好き」と回答したことば》(%)

1. また	96.5	(又	3.5)
2. ちょっと	94.6	(一寸	5.3)
3. あなた	77.7	(貴方・貴女	22.2)
4. あいさつ	65.2	(挨拶	34.7)

「また」「ちょっと」については、ほとんどの人が、仮名表記の方が好きだと回答している。「あなた」「ちょっと」は、漢字表記では熟字訓にあたるが、「五月雨」「紫陽花」と違って、仮名表記を選んだ人の方が多い。「五月雨」「紫陽花」の漢字のイメージが影響しているものと思われる。「挨拶」は、先の「頃」と同じく表外字であるが、こちらは、「頃」ほど身近ではなく漢字表記に堅苦しさを覚えた結果ではなかろうか。

次に、女子大生たちの漢字に対する具体的な意識を調べてみよう。以下に挙げる3つの質問(Q1～Q3)に対する回答を見ていく。

◆ 漢字で書くか、仮名で書くか (その2)

〈Q1〉書こうとすることばが、漢字でも仮名でも書ける場合どうしますか？

- (ア) できるだけ漢字を使いたい 47.5%
- (イ) できるだけ仮名を使いたい 2.9%
- (ウ) どちらともいえない 42.0%
- (エ) その他 7.6%

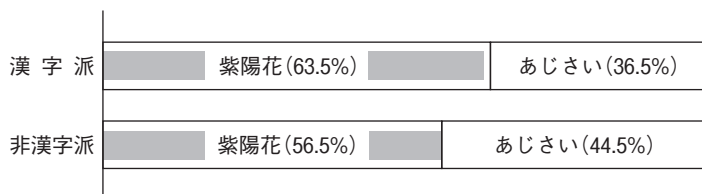
「漢字か仮名か」という視点でみると、できるだけ漢字を使いたい人はかなり存在するが、できるだけ仮名を使いたい人はほとんどいない。

「できるだけ漢字を使いたい」人は、単純に考えると仮名よりも「漢字で書く方が好き」な人だと推測される。そこで、Q1で「漢字を使いたい」と回答した人が、先の10語の各ことばで漢字の方を選択したといえるかどうか調べてみることにする。

ここで、Q1の回答(ア)を「漢字派」とし、それ以外の回答を「非漢字

派」としておく。「漢字派」の人は、10語のことばについても、漢字表記の方を選んだ比率が高く、「非漢字派」の人は、「漢字派」の人と比べて仮名表記の比率が高いという傾向があるのではないかと予測することができる。

たとえば、「紫陽花」の場合、漢字派と非漢字派とについて、それぞれ選んだ表記の比率を帯グラフで示すと、次のようになる。



やはり漢字派のほうが漢字を多く選んでいる。そして、両者の差が統計的にみて、偶然によるものではなく意味のあるものか否かを調べてみた。その方法をカイ自乗検定というが、これによって先の10語について調べてみた。その結果、上の「紫陽花」と同じく漢字派が漢字を選び、仮名派が仮名を選ぶ傾向の有意差が認められたことばは、次の5つであった (χ^2 の値が3.84以上で危険率5%以下の有意差が認められる)。

「全く」 ($\chi^2 = 9.30$)	「紫陽花」 ($\chi^2 = 4.42$)
「あいさつ」 ($\chi^2 = 8.58$)	「あなた」 ($\chi^2 = 6.85$)
「ちょっと」 ($\chi^2 = 13.81$)	(以上、自由度 = 1)

全体として仮名書きが多かったことばが4語(また、ちょっと、あなた、あいさつ)あった。そのうち3語で有意差が認められている。決定的な理由はわからないが、多くの人が仮名書きしても、漢字派は漢字に固執しているということであろうか。

◆漢字の知識量

〈Q2〉漢字を多く知ることについて？

- | | |
|-----------------------------|-------|
| (ア) 漢字をできるだけ多く知っている人になりたいと思 | 77.3% |
| (イ) ふだん使う程度の漢字を知っていれば十分だと思う | 22.4% |

- (ウ) 漢字なんか知らなくてもよいと思う 0.2%

漢字をできるだけ多く知りたい人が8割近くいる。ふだん使う程度の漢字知識では、満足できないのである。漢字に対する知識欲の高さを表しているといえよう。

◆正確な漢字

〈Q3〉レポートを書くとき、ちょっとあやふやな漢字があった場合について？

- (ア) だいたい正しいと思えるなら、そのまま書けばよい 5.8%
(イ) 少しでも自信がなければ、辞書や字典で調べるべきだ 88.1%
(ウ) 仮名で書けばよい 5.3%
(エ) その他 0.8%

女子大生たちのほとんどは、間違った漢字は書くべきではないという意識をもち、辞書で調べることを当然だと認識しているようである。自分自身の漢字知識に正確さを求めていることの表れであろうか。

●愛される漢字、嫌われる漢字

日本語使用者は、漢字のほかに、平仮名、片仮名、そしてアルファベットをも使いながら生活している。ただでさえ複雑な表記システムの中で、漢字には、その一つ一つに字形、筆順や送り仮名という「書き方」、音読みや訓読みという「読み方」など覚えるべきことが多くある。1945字の常用漢字を小中学校で習っていく中で、漢字嫌いの生徒が出てきてもなんら不思議ではない。

その一方で、漢字検定の受験者が増加の傾向にあるという。難しい漢字を書いたり読んだりすることや、それらの漢字を習得しようと努力することは、漢字が好きだからこそできることであろう。と同時に、日本人の漢字に対するコンプレックスの表れだということもできよう。

そして、アンケート調査の結果からわかるように、女子大生たちもまた、多くの漢字を知りたいと考え、正確な漢字を書きたいという意識をもっている。今回の調査では、女子大生たちの多くが漢字好きであることが明らかになった。

漢字検定に精を出している大人たちがいて、他方、漢字の勉強が嫌いな小中学生がいる。まさに「愛される漢字」であり、「嫌われる漢字」である。

〔作業協力者〕 加藤知子・藤村純子

けいごのご

(LC りぼーと 7 1997年10月)

「この宛先まで、ご応募してください」。

最近、テレビなどで、このような言い方をしているのを聞くことがあります。これを“ちょっとおかしいな”と感じる人は、どれくらいいるでしょうか。それとも、間違いに気がつきませんか。

「敬語」というと、難しくて堅苦しいイメージがありますが、今回は次の三つの点を中心に敬語を考えてみることにしました。

- ・敬語の現代的な傾向について
- ・昔と比べて変化してきている敬語について
- ・最近気になる敬語について

武庫川女子大学の学生を調査対象者として、アンケート調査を実施しました。調査時期は1997年1月、330人から回答を得ることができました。以下に調査結果の一部を報告します。

◆「やる」「あげる」〈ネコにえさを与えるとき〉

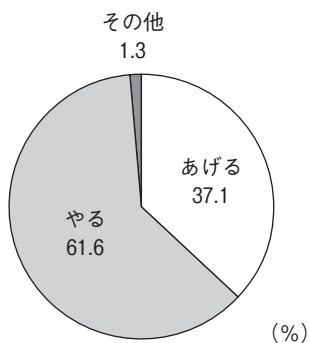


図 1

「やる」は、話者と同等以下、あるいは動植物に対して、何かを与える場合に使われる。他方、「あげる」は謙譲語であり、相手への敬意を表すことばとして使われきた。したがって、「ネコにえさを～」となると「やる」になるのが原則である。しかし、最近は、「あげる」を「やる」の丁寧な言い方として使用する傾向が強い。「あげる」の丁寧語化である。そしてそれは、「やる」がぞんざいで、あらっばいことばとし

て認識されていることの裏返しでもある。「あげる」が使われるのは、話者より目上か目下かという概念ではなく、丁寧に、品よく話そうという意識の強さに原因があると考えられる。調査の結果によると、「やる」が6割で「あげる」は残り約4割であった(図1)。調査前の予想よりも「やる」がはるかに多い。この結果をどう解釈するか。

第1は、女子大生たちが、「やる」に対して、丁寧によりも本来の用法の意識をもっていていると考えるものである(ただし、この可能性は非常に少ないだろう)。第2は、本来の用法を意識的に使用している(あるいはアンケートに意識的に答えている)と考えるものである。つまり、学習によって敬語の知識を十分にもっている場合である。第3は、目下に限らず「やる」を使う場合である。数年来、一部女子中学生が男子のようなことばを使うという話を聞いている。その傾向が進んでいるとすれば、目下に限らず、同等の者に対して「やる」を使う可能性が考えられる。

第2か第3の可能性が高い。継続して調査したい。

◆「ご連絡ください」「ご連絡してください」〈連絡をしてほしいとき〉

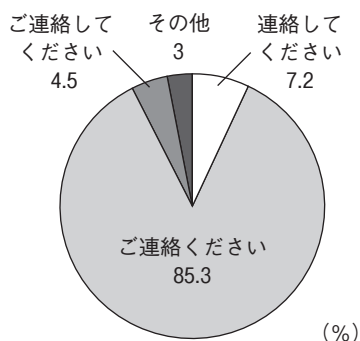


図2

「ご～する」は、話者の行為に使われる謙譲表現である。「連絡する」のが話者の行為である場合に、「ご連絡(いた)します」などと用いる。それが相手の行為であるのに「ご～する」と表現すると誤用である。しかし、最近、誤用である「ご連絡してください」ふうの表現が多く見受けられる。

調査では、「就職などで企業への手紙を書くとき、どのことばづかいをしますか」という設定をした。その回答結果によると、「ご連絡ください」を選択した人が8割以上であった(図2)。女子大生たちのほとんどは、「ご連絡する」について正しい知識をもっていると言える。ただし、場面設定による影響があったかもしれない。

◆「おっしゃられる」〈相手の発言〉、「休ませていただきます」〈休みの張り紙〉

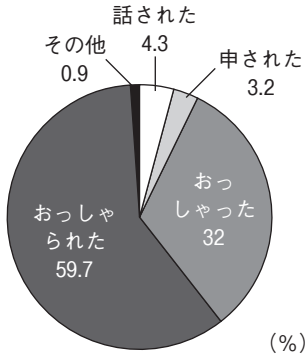


図 3

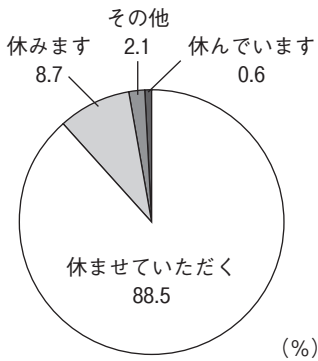


図 4

次に、「相手の発言について言うとき」に、
 どう言うかという質問の回答を見ると、
 「おっしゃられたように」を選んだ人が約
 6割もいる。

また、「飲食店のドアに書くとしたらど
 の書き方がいいか」という質問に対する回
 答では、「休ませていただきます」を選ん
 だ人が約9割もいた（図4）。

「おっしゃられる」、「～させていただきます」
 は、「二重敬語」あるいは「過剰敬語」
 といわれるものである。「おっしゃられる」
 は「おっしゃる」だけで尊敬語であり、そ
 こに尊敬の助動詞「れる」がさらについて
 いる。他方、「させていただきます」もへ
 りくだり過ぎだというものである。アン
 ケートの「休ませていただきます」も、飲
 食店が休むのは、受け手（客一般）の承認
 を得なければいけないことでもないし、ま
 た、受け手の恩恵によって成立すること

もないので、へりくだり過ぎた表現だというのである。以上のことから、こ
 れらの「おっしゃられる」「～させていただきます」は、望ましくないとい
 する意見もある。

しかし、図3、4からもわかるように、これらの過剰な敬語が女子大生か
 らかなり高い支持を得ている。「おっしゃる」を選んだ人は、三割強であり、「話
 された」は4.3%であった。また、完全な誤用である「申された」も3.2%あ
 った。

◆「～していただき」「～してくださり」〈お礼状で〉

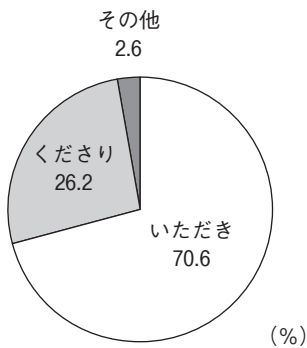


図 5

お礼状で、「お送りいただきありがとうございます」「お送りくださりありがとうございました」のどちらを使うかという質問。「～していただき」は、「～してもらう」の謙譲表現で、「わたしが、あなたによってしてもらう」という、話者中心の表現である。他方、「～してくださり」は、「～してくれる」の尊敬表現で、「あなたが、わたしに対してしてくれる」という、相手中心の表現である。そこから、相手を中心とした「～してくださり」の方が、より敬意が高いと考える立場もある。

調査結果を見ると、自分中心の「していただき」が7割以上を占めている(図5)。尊敬表現よりも謙譲表現のほうが好まれることを意味するのであろうか。

◆「される」「なされる」——レル形による敬語の簡略化

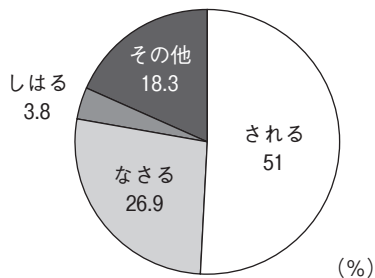


図 6

「食べる」の尊敬表現としては、「召し上がる」も「食べられる」も可能である。つまり、特別な尊敬語と尊敬の助動詞レルをつける形とが可能である。「言う」や「する」についても、同様に、それぞれ「おっしゃる・言われる」「なされる・される」の二通りがある。

そして、近年は、特別な語形よりもレル形が好まれる傾向があると言われている。

そこで、「なされる」と「される」についてどちらを好むかという質問をした。その結果が図6である。「知らない人が困っているときにどのように声をか

けるか」という質問に対して、「どうされたのですか」と答えた人は半数以上であり、「どうなさったのですか」とした人は全体の約4分の1である。この一つの結果から、全体を推し量ることはもちろんできないが、「レルさえつければ尊敬になる」便利さによる、敬語形式の簡略化の表れとも考えられる。

◆関西の敬語「～はる」

大阪・京都を中心とした「はる」敬語を、女子大生たちはどのように使っているだろうか。下のような5つの場面を設定して、「あなたの友達は、どのことばづかいをしますか」という質問をした。「はる」を使用する場合の回答率は次の通りである。

直接先生に対して言う場合

「会議に行き（か）はりますか」 9.8%

直接先輩に対して言う場合

「合宿に行き（か）はりますか」 19.9%

あなたに対して先生のことを言う場合

「今日は来て（た）はるわ」 29.3%

あなたに対して先輩のことを言う場合

「今日は来て（た）はるわ」 37.4%

あなたのお母さんのことを言う場合

「懇談会に行き（か）はるの」 46.9%

〈相手に直接話す場合〉

先生に対しては9.8%と1割に満たない。先輩に対しては約20.0%である。自分より目上の人と直接話す場合、「はる」はあまり使わないようだ。一番多かったのは、先生には「会議に行かれますか（74.6%）」、先輩には「合宿に行かれますか（67.6%）」であり、やはりレル形が好まれていることが分かる。

〈第三者について言う場合〉

その場にいない人に対して敬語を使うかどうかという視点からの質問。

「あなたのお母さんについて」が一番多く約半数。先輩に対しては37.4%で、先生（29.3%）より10%近く多い。このことから、女子大生たちは「はる」敬語を、相手と第三者との関係が心理的に身近である場合に使用していると推察できる。

ちなみに、先生と先輩に関して一番多かった回答は「今日は来てるわ」という敬語を用いない言い方で、先生に対しては61.6%、先輩に対しては55.7%であった。先生に対する尊敬度がよく表れていると考えていいのだろうか。

話しことばの将来

(LC りぽーと11 1999年10月)

今回のレポートのテーマは、「21世紀の日本語の話しことば」です。わたしたちが、普段話すのに使っていることば、あるいは、テレビやラジオから聞こえてくることばに対して、現代の女子大生たちはどのように考えているか、また、21世紀にそれらがどのようにあるべきだと考えているか、という点についてアンケート調査を行いました。21世紀のことばの担い手の中心となる若者たちの、話しことばに対する意見や考えを通して、将来の話しことばの姿をさぐろうというものです。調査時期は1999年2月、武庫川女子大学の学生を調査対象者として、357人から回答を得ることができました。

以下に「話すこと」「ことばの教育」「方言」「敬語」の4項目について、調査結果の一部を報告します。

◆話すことについて

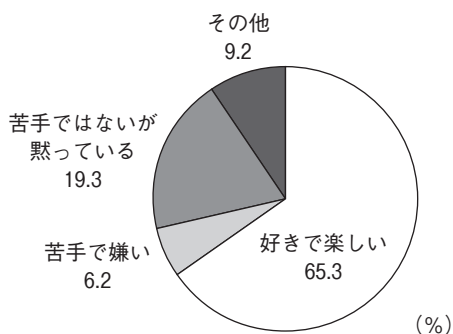


図1 話すことが好きか？

話すことが好きで楽しいと答えた人が約65%。反対に苦手で嫌いと答えた人は約6%。苦手ではないが黙っている方だと答えた人が約19%という結果が出た(図1)。好きで楽しいという人と、苦手ではないと答えた人を合わせると、8割強の人が話すことが好きなことがわかる。

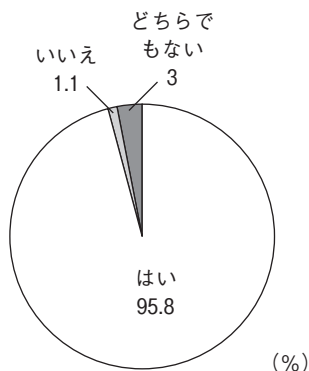


図2 話すことが上手になりたいか？

話すことがもっと上手になりたいと思うか、という質問に対しては、95.7%の人がはいと答えている。いいえと答えた人は約1%にしか過ぎない(図2)。

これらのことから、女子大生の多くが、話すことが好きで、そして今よりももっと、話し上手になりたいと考えていることがみてとれる。裏返せば、今の自分の話し方には、まだまだ満足していない、ということである。次にあげる調査結果から、その理由のひとつがうかがえそうだ。

◆ことばの教育について

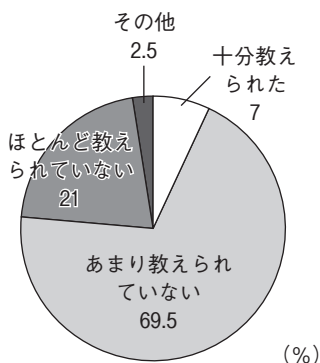


図3 話し方を学校で教えられたか？

話し方、話すことなどについて学校で教えられてきましたか、という質問に対しては、図3のような結果が出た。十分に教えられた、という人はわずかに7%。あまり教えられていない(69.4%)と、ほとんど教えられていない(21.0%)を合わせると、実に9割以上の人々が、小学校から高校までの間に話すことを教わらなかったと回答している。つまり、話すことは好きだけれども、話すことについての教育を十分に受けたようには思わないから、

話すことがもっと上手になりたいと考えているのだ、という図式が成り立ちそうだ。

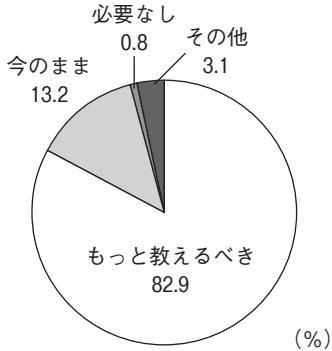


図4 将来の子どもたちには？

将来の子どもたちについても、話し方、話すことについてももっと教えるべきだと考える人が8割以上である（図4）。

その教える内容について、大事だと思うものは図5のようになっている（複数回答）。

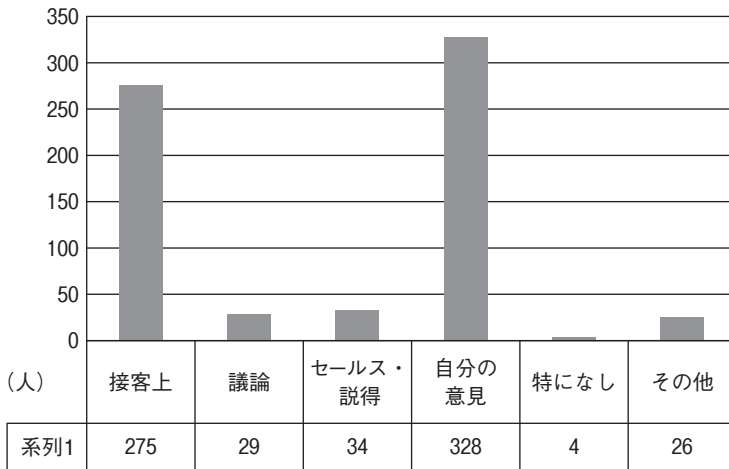


図5

一番多かったのは、自分の意見・気持ちを伝える話し方で、328人。有効回答数が357人なので、9割以上の人が大事だと回答している。次に多かったのは、接客上での話し方で、275人（8割弱）。接客上での話し方を教えるのが大事だとしたのは、女子大生たちの経験によるものと考えられる。1995年5月に、本学学生に行ったアンケートでアルバイトの職種を聞いたことがあったが、圧倒的に接客業が多いという結果であった。現在も、アルバイトの傾向がそれほど変わっているとは考えられない。またそのアンケート結果

では、アルバイト先がことば教育の場としてとして大きな役割を果たしていることも明らかになった（LC りぼーと vol.4で報告）。これらのことから、女子大生たちが、接客上での話し方を非常に大切だと考えていることがわかる。より実生活に則した場での話し方を教えることが大事だと思っているのである。回答は、ほぼこの二つに集中していた。議論で相手を負かす話し方、セールスや説得の話し方などは、女子大生たちにとっては、現在の生活上、切迫しないことがらにあたるためか、回答数が非常に少ない。

◆方言について

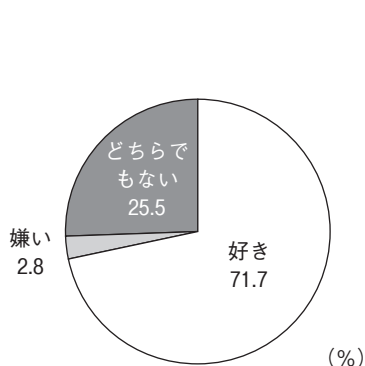


図6 方言が好きか？

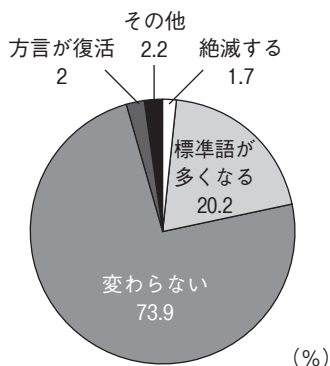


図7 将来、方言はどうなるか？

方言（あなたが使っている方言）について聞いたところ、方言が好きとした人は、7割以上、嫌いとした人は3%にも満たなかった。どちらでもないとした人は約4分の1（図6）。将来の方言に関しては、2つの質問を行った。まず、方言が将来どうなると思うか、という質問に対しては、今と変わらないが7割強、標準語が多くなるとした人が約2割であった（図7）。将来方言はどうなるのがよいと考えるか、という質問では、今のまがよいが66%、もっと残すべきだとする人が32%であった（図8）。

そこで、女子大生たちには、方言の将来に対する考え方の傾向があるのかどうかを、カイ自乗検定によって調べてみた（ χ^2 の値が3.84以上で危険率5%以下の有意差が認められる。自由度1）。結果は、 $\chi^2=14.69$ であり、

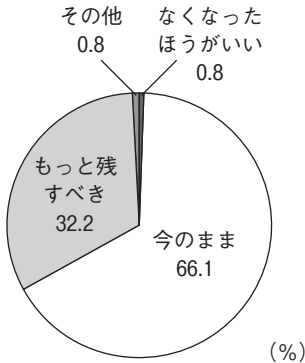


図8 将来方言はどのようなのがよいか？

次の2点が、統計的にみて、偶然によるものではなく意味のある傾向であることわかった。

①現在の方言は、将来も今と変わらないだろうと考える人は、将来も今のままの状況がよいと考えている。

②現在の方言が減少し、将来標準語が多くなると考える人は、方言をもっと残すべきだと考えている。

②は、標準語が方言にとってかわるのではないだろうか、危機感を覚えている人たちだと言えそうだ。

◆敬語について

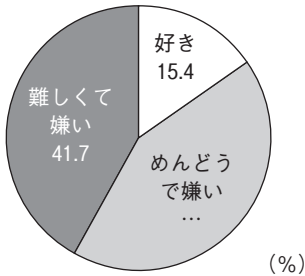


図9 敬語は好きか？

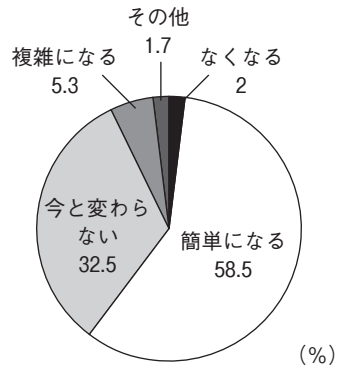


図10 将来敬語はどのようなか？

敬語については、過去にアンケート調査を行ったことがある（1997年1月）。内容は、敬語の具体的な使い方を聞いたものであり、その結果、女子大生たちは、敬語の知識を学習によってある程度もっており、過剰敬語やレール敬語の多用などといった特徴が見られた（LC りぼーと vol.7で報告）。今回、その敬語について、好きか嫌いかと質問したところ、好きと答えた人は約15%

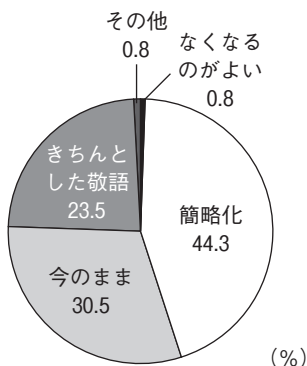


図11 将来、敬語はどうなるのがよいか？

であり、めんどうで嫌い(19.8%)と、難しく嫌い(41.7%)を合わせると、6割以上の方が敬語を敬遠していることがわかる(図9)。そして、めんどうだからというよりも、難しいから嫌いだと感じている人の方が多いことが注目される。敬語用法の難しさが、過剰敬語やレール敬語の多用という、いわば単純な敬語形式を使用する傾向を引き起こしている

と考えられる。

将来の敬語については次の2つの質問をした。まず、将来どうなると思うかという質問に対しては、今よりも簡単になると答えた人が6割弱、今と変わらないとした人が3割強であった(図10)。次に将来どうなるのがよいと考えるかについては、今よりは簡略化するのがよいとする人が約44%、今のままでいいとする人が約30%、もっときちんとした敬語を使うのがよいと回答した人が約23%であった(図11)。

これら将来の敬語に関する2つの回答についても、考え方の傾向があるのかどうか、カイ自乗検定で調べてみることにした(χ^2 の値が5.99以上で危険率5%以下の有意差が認められる。自由度2)。結果は、 $\chi^2=9.78$ であり、次のような傾向があることがわかった。

①将来、敬語は今よりも簡単になるだろうと考えている人は、今よりももっと敬語を簡略化するのがよいと考えている。

②将来の敬語は今と変わらないのではないかと考えている人は、将来も今のままの敬語でよいと考えている。

①②から、将来の敬語のあり方に対する希望と、自分の予測とはパラレルな関係にあることがわかる。

「紅白歌合戦」に見る30年間の文字テロップ

—1960年代から1980年代まで—

設 楽 馨

1. はじめに

テレビを見ていると、その画面には様々な文字情報が現れる。歌番組で言えば、番組冒頭に番組のタイトルや出演者の名前が現れる。歌手が歌い始めると歌のタイトルや作詞・作曲した人の名前を目にする。番組によっては、ほかにも多くの文字を読むことがある。歌い終わった歌手と他の出演者たちがおしゃべりを始めたところで、彼らが発話したことをそのまま文字で見たり、話題に関する補足情報を読んだりすることもある。そうした文字情報を本稿では「文字テロップ」と呼ぶことにする。

図1に具体例を挙げよう（放送はカラー。ここでは白黒で表示する）。



(1) 番組のタイトル



(2) 出演者の名前



(3) 歌の情報



(4) 出演者の発話



(5) 出演者の発話



(6) 補足情報

図1 NHK「きよしこの夜」(2006年9月27日21時15分放送)より

図1(1)には番組のタイトル「きよしとこの夜」⁵⁾が画面上部に確認できる。(2)では、画面下部に2名のゲスト出演者の名前が現れる。(3)の画面下部では、歌のタイトルと作詞者・作曲者の名前が読み取れ、歌のクレジットと言える情報が明示される。このような文字テロップはかなり以前からよく目にする。

一方、(4)と(5)には、出演者に被せられて画面の下方に、出演者が発話した内容を読める文字テロップが見られる。それぞれ、(4)には「お土産を持ってきました」、(5)には「これ洗ったときなさい!」が、かなり大きな文字サイズで確認できる。(6)は小さい文字であるが、画面左下に「かつて漁師だった鳥羽さん 調理師免許も持っています」とある。これは、画面に映る出演者が、土産に持ってきたブリをさばいているところで、その出演者についての補足情報を提示している。

このような文字テロップは、いつごろから見られるのだろうか。先に示したものと違い、(4)(5)(6)に挙げたようなものは、古くからあるものではなさそうだし⁶⁾、多くの歌番組で見られる、というもののでもなさそうだ。文字テロップは番組や時代に応じて変わるものなのだろう。

では、実際の歌番組ではいつごろからどのような文字テロップが見られるのか。本稿では、年末に毎年放映されるNHKの「紅白歌合戦」(そのうち、資料が得られた1960年代から1980年代まで)を資料として、そこに現れる文字テロップの時代的変遷を調査していく。文字テロップに変化が確認される場合には、その背景は何か、時代を考慮して考察してみたい。

5) タイトルは番組のイメージに合わせたデザインになることが多い。ここでも、助詞「と」は、「夜」に合わせて、また、メイン出演者のスター性になぞらえて星マークの中央に置かれている。また、「夜」の文字の中にはそのメイン出演者のシルエットがしのばせてある。

6) 2009. 8. 22. 朝刊『朝日新聞』28面「テレビ字幕、なぜ入れるの?」という見出しの記事には、「80年代まではテロップは少なかった。」とあり、90年代以降のバラエティ番組で文字テロップが活用されてきたとする記述が見られる。

2. 資料について

2.1. 「紅白歌合戦」

まず、資料に用いた番組についてそのあらましと資料性を述べる。

番組では、その年の日本を代表する歌手が出演し、男性歌手と女性歌手が白組と紅組に分かれて交互に持ち歌を歌う。その歌を審査委員が採点し、紅組・白組の勝敗を決定する。

この番組のテレビ放送が始まったのは、1953年である⁷⁾。ただし、「紅白歌合戦」として番組が始まったのはそれより前で、第1回はラジオ放送の正月特別番組として1951年に放送された。その後、正月の放送としては最後になる1953年の第3回までラジオ放送のみであった。同年テレビの本放送開始を受け、その年の大晦日に第4回紅白歌合戦がテレビ放送されることとなる。白黒からカラー放送になったのは1965年の第15回紅白歌合戦であった。2010年10月現在、直近の放送は2009年第60回紅白歌合戦である。

このように、テレビ放送の最初から長期にわたって存続しており、なじみがあって人気の高い番組⁸⁾でもあり、まさに年末恒例の番組として日本に浸透しているものと言える。

ところで、勝敗結果はラジオ放送のみであった第3回まで白組が勝ち続け、テレビ放送になった第4回は紅組が勝った。この第4回は、テレビを意識した女性陣が華やかな衣装で登場し、男性陣は「テレビは怖い、衣装に負けた」と悔しがったようだ。こうした事実から、映像が流れることで視覚的に楽しめる放送が好まれるようになったと考えられる。文字テロップも視覚的な演出であり、当時は画期的な映像の要素の一つだったのである。

2.2. 文字テロップにおける資料性

ここで、文字テロップを調査するための資料として、「紅白歌合戦」に指定する利点に触れておく。

7) 以下、紅白歌合戦の歴史についてはNHKがホームページに掲載する記述を参考にした。〈<http://www.nhk.or.jp/kouhaku-blog/008/27596.html>〉(2010年10月5日)

8) 人気については、株式会社ビデオリサーチ公開の視聴率データを参考にした。

文字テロップの時代的変遷を調査するためには、異なる番組で比べることは困難である。それぞれの番組が違えば文字テロップの様相（出現数及び、表記内容）⁹⁾も異なるからだ。それは文字テロップがテレビ番組という一つの映像作品における演出の一種であることから考えれば、当然であろう。音声や効果音、背景となる舞台装置などとともに、文字テロップも番組に応じて変わるのである。

そこで、ここでは60年（ラジオ放送を除けば58年）という長期にわたって同じスタイルで放送され、しかも長く人気のある番組である「紅白歌合戦」を資料とした。同じ番組で時代変遷を調査でき、しかも人気があることから、テレビ放送全体への影響が大きい番組だと考えられる。

3. 資料と調査方法

表1 「紅白歌合戦」の資料一覧¹⁰⁾

回／放送年	資料	回／放送年	資料
第11回／1960	台本	第27回／1976	映像
第14回／1963	台本	第28回／1977	映像
第15回／1964	台本	第29回／1978	映像
第16回／1965	台本／映像	第30回／1979	映像
第17回／1966	映像	第31回／1980	映像
第19回／1968	映像	第32回／1981	映像
第20回／1969	映像	第33回／1982	映像
第21回／1970	映像（欠損あり）	第34回／1983	映像
第22回／1971	映像	第35回／1984	映像
第23回／1972	映像	第36回／1985	映像
第25回／1974	映像	第39回／1988	映像

9) 設楽（2005）では、バラエティ番組35種の各5分から取り出した文字テロップ（計1480）を分析し、番組の内容によって1番組当りの文字テロップ出現数の平均が異なること、表記内容が変わることを明らかにしている。

10) 「NHK アーカイブス」を使用。台本・映像とも持ち出し不可。閲覧時に出現した文字テロップを一例ずつ書きとめ、データとした。

調査できた「紅白歌合戦」は表1の通り。1960年代以前の資料を得ることはできなかった。

4. 結果その1－台本

台本には枠が書かれ、そこに「T」や「TW」という記号¹¹⁾が付されたものがある。この記号のある枠は、画像に文字テロップが被せられることを示す。番組の頭から順に、開催地、番組タイトル、審査員ほか出演者の名前や役割、歌のタイトルが書かれていた。文字テロップの数量は、出演者が多い年に多く、出演者が少なければその数だけ減少する、という具合であった¹²⁾。

表2に、実際の台本に記された第11回の文字テロップの表記内容を挙げ、その意味を解釈して示す。なお、「番号」とは「T」と共に書かれていた番号である。

表2 第11回紅白歌合戦（台本）

番号	表記内容	意味
1	東京有楽町 第十一回 NHK 紅白歌合戦九時開幕 日劇 第11回 NHK 紅白歌合戦	撮影場所 開始時刻の告知 会場名 番組タイトル
2	東京有楽町 日本劇場から中継	撮影場所と方法の告知
3	審査員	出演者の役割
4	前年優勝 紅組	前回の勝敗の結果
5	白組	(詳細不明)
6	紅組司会者 中村メイコ	出演者の役割と名前
7	審査委員長 吉川義雄	出演者の役割と名前
—	〇組優勝	勝敗の結果（未定含む）

11) 「テロップ」「テロップダブル」の略。NHK では映像に被せることを「ダブる」と言う。

12) 東京オリンピックのある1964年以前は、文字テロップ制作は美術担当者によって1枚1枚手書きであった。そのため、今より量産が困難だったと思われる。文字テロップ制作の変化と文字テロップの相関は今後の課題としたい。

この表を上から順に見ていくと、撮影場所、時刻、タイトル、出演者の役割が初めに示されることがわかる。番組冒頭で、「どこで何が始まるのか」を提示し、当該の番組を見る上で枠組みとなることを認識させるものと言える。最後に勝敗の結果、つまり優勝チームを明示して終える（○印に「紅」または「白」が入るものと思われる）。7番以降「○組優勝」までの間には、無表記の枠が106個、確認された。ここには、ほかの回の表記内容（後述）から推せば、歌手名や歌のタイトルなど、歌の情報が表記されるのだと考えられる。

以上の表記内容は、第14回、第15回、第16回でもほぼ変わらない。なお、第14回、第15回、第16回では、出場者数に応じた歌手名と歌のタイトルが確認された。ほかに、番組のその時々趣向として、得点表の説明（第15回）や各地方代表者による審査委員出場（第16回）など、その回ごとに多少の違いが見られた。

5. 結果その2－映像資料

続いて、映像に出現した文字テロップを見ていく。表3では、第16回の映像で確認できた文字テロップの表記内容と意味を示す。ただし、この表の「番号」は、表2を参考に意味ごとに振り分け、代表的な文字テロップのみを挙げるにとどめた。

表3 第16回紅白歌合戦（映像）

番号	表記内容	意味
1	第16回 NHK 紅白歌合戦 東京宝塚劇場から中継	番組の枠組み
2	審査委員長 坂本朝一 円地文子	出演者の情報 (審査委員長と審査委員の場合)
3	北海道地方 種田正雄 林幸恵 東北地方 北嶺澄仁 花田サダ子	出演者の情報 (各地方審査委員の場合)
4	高原のお嬢さん 舟木一夫 アリュेशन小唄 三沢あけみ	歌の情報 (歌のタイトルと歌手の名前)
5	白組優勝	今回の勝敗の結果
6	第16回 NHK 紅白歌合戦 終 NHK	番組の終了

1 番から確認すると、番組タイトルと中継場所から始まることがわかる。しかし、映像には文字テロップ以外にも視認できる文字が見られた。例えば、舞台セットの上方に吊るされた大会名「紅白歌合戦」、同じく舞台セットで背景に作られた「NHK」の文字、歌手を案内する系の人物が持っているプラカードに書かれた「紅組」「白組」、そうした全ての文字情報が番組の演出となり、「紅白歌合戦」の始まりを示す枠組みになると考えられる（ただし、これらは会場にいる観覧者にも、文字化して明示していると考えられる）¹³⁾。

次に映像で取り上げられるのは、歌を審査する審査委員たちである。表3の2番に挙げた審査委員長や審査委員のほか、7名の名前が文字テロップに見られる。さらに3番で、各地方を代表する審査委員が計8地方、提示される。よって、文字テロップには8つの各地方名と16名の名前が現れた。その後は、大会委員長、司会2名の名前が現れ、歌が始まると4番に示したような歌のタイトルと歌手名が出現した。こうした2番以降の表記内容は、出演者の情報としてまとめられる。

また、4番の表記内容は、歌のタイトルが見られることから、出演者の情報だけでなく、歌の情報にもなっている。表3の第16回（1965年放送）では、タイトルと歌手名だけだが、その後はタイトルと共に作詞者及び、作曲者の名前が併記され、歌のクレジット（著作者、制作者）となる情報として現在と同じような表記内容になる。

最後に5番、6番のような勝敗の結果と終了を告げる文字テロップが見られ、計84の文字テロップを確認した。

6. 結果その3－表記内容の変化

以上、1960年代の台本と映像を調査し、具体的な表記内容を示した。同様に、表1に示した調査対象の「紅白歌合戦」全てで、それらの表記内容は共通して確認することが出来る。

13) 「紅白歌合戦」は会場にて審査委員や一般客が観覧しており、彼らに文字テロップは視認できない。つまり、会場にいる観覧者は、舞台美術によってのみ、文字化された大会名やチーム名が視認できる。

なお、後年になるほど、「歌合戦」だけでなく「応援合戦」がより多く挿入される傾向が見られた。こうした応援のときに、入れ替わり立ち替わり出演するタレント（歌を歌わない出演者）に伴って、タレント名を表記した文字テロップが出現する。これらの文字テロップは、表3の2番や3番に示した「出演者の役割と名前」と同様に、出演者の情報と言えるだろう。

ところが、1982年以降、表3に示したような文字テロップとは異なるものが出現するようになった。それは、歌の「歌詞」である。歌詞は、「紅白歌合戦」では1982年放送の第33回紅白歌合戦より確認され、その後（第34回、第35回、第36回、第39回）は毎回、確認することが出来た。

7. 「歌詞提示」の背景

では前章で述べた異なり、つまり「歌詞提示」は、なぜ1982年から為されているのだろうか。

当時のテレビ視聴に関する記述¹⁴⁾によれば、視聴態度の変化が指摘されている。1960年代は、「茶の間のテレビ視聴」と呼べるような、一家に一台のテレビを家族そろって茶の間で見る形態であった。これが、家族人数の減少（家族形態の変化）や、多忙な生活で家族がなかなかそろわないという生活習慣の変化、サブテレビの普及というような外的条件の変化に伴って、1980年代後半には「個人視聴」へと移り変わっていった。

しかしながら、そうした個人視聴の増加が歌詞提示に関連したとは考えにくい。そこで、歌謡曲ならではの背景があるのではないかと仮定して考察していく。

7. 1. 歌詞を読む必要性

歌謡曲のジャンルについて、1960年代には演歌やジャズがその中心だった。そこからフォークブーム、洋楽の移入があり、英語のカバー曲や訳詞を歌うことが流行してゆく。その後、1980年代後半になってJ-ポップが発生する（菊

14) NHK 放送文化研究所（2003）、NHK 放送世論調査所（1983）。

池（2008）によれば、J-ポップは1989年誕生とされている。

J-ポップとは、和製洋楽という意味を持ち、演歌などそれまで日本で作られていた楽曲が持つリズムや音の移行から外れているものを指す。8ビートや16ビートを用い、コード移行も洋楽と同様に作られる歌謡曲である。そうしたJ-ポップでは、歌詞や歌い方についても日本語らしさが排除される傾向がある。英語のような発音で歌うこと、リズム構造を重視して発音方法が変えられること¹⁵⁾が指摘されている。

菊池（2008）は「八〇年代は、日本流行歌史のなかで大きな転換期」だと言う。家族団らんのお茶の間で聴けるという時代には、各ジャンルがみんな、歌謡曲のフィルターで眺めることができたけれど、その傾向は1980年代に薄れていったと言うのである。

つまり、歌謡曲の聴取について視聴者全体で境界を持たない、という時期ではなくなっていった、ということになる。出演者の多い「紅白歌合戦」の場合、各ジャンルの歌謡曲を用意することで、聴取しにくい歌も含まれる事態となったのだろう。聞き取りにくい歌謡曲に対して、視聴者の中には「聴きながら歌詞を見たい（読みたい）」という意識が形成されていったのではないだろうか。歌謡曲のジャンルが新たに発生していくなかで、歌詞を読むことの必要性が生じたと考えられる。

続いて、歌謡曲が受け入れられる方法として、「聴く」、「歌う」という行為の移り変わりを観察し、考察を深めることにする。

7.2. 歌謡曲を聴く

1960年代、歌謡曲を聴く¹⁶⁾道具として普及していたのは、レコードとカセットテープであった。その後、1961年に家庭用テープレコーダー発売、1968年に「ラジカセ」¹⁷⁾商品化と続き、カセットテープが家庭に広まり、また、私的録音が盛んに行われた。こうしたことは、徐々にレコードの売り上げへ影

15) 沢木幹栄「J-POPと日本語－歌はことばにつれ－」（2007. 12. 7）の講演より。
1979年ごろから歌詞に英語を入れることが見られ、「日本語と英語が混在するとき、日本語の発音を英語に近づけると不自然さが減る」と考察されている。

響を及ぼす。さらに1979年になると、「ウォークマン」¹⁸⁾が発売される。1982年に「CD（コンパクト・ディスク）」が現れ、その前年、1981年10月にはパイオニアから「絵の出るレコード」として「LD（レーザー・ディスク）」が発売されている。

歌謡曲は家で聴くレコードから、屋外にも持ち運べるラジカセへ、そして歩きながら聴くウォークマンへと、多様な聴き方が為されるようになった。野島（1979）によれば、「現代の青年世代」¹⁹⁾の多くは、ラジオやテレビの歌謡曲を聴いたり、好む歌手の歌をレコードや録音テープで聴く習慣をもっている」とあり、1970年代後半には視聴者であり番組制作者となりうる世代の大半で、日常的に歌謡曲を聴く習慣が形成されていたことが確認できる。

7. 3. 歌謡曲を歌う

「聴く」のでない、もう一つの歌謡曲の楽しみである「歌う」ことについて、「カラオケ」について述べる²⁰⁾。カラオケでは、LD 発売に続いて1982年10月に発売されたカラオケ用 LD を使った「映像カラオケ」の出現が注目される。

カラオケは、1970年代から広まり始めたが、当時は歌うことを目的に作られたカラオケテープに合わせて、歌詞カードを見ながら歌う、というものであった。それが、1980年代からは、画面に背景画像や歌詞の文字テロップが流れ、モニター画面を見ながら歌えるようになったのである。

カラオケを利用する場所としては、1970年代は飲食店や宴会場に設置され、社交場として広まっていった。その後、1970年代後半から家庭用カラオケの

16) オーディオやレコードの歴史については倉田（2006）を参考にした。

17) ラジオが聴けてカセット式テープレコーダーが一体となったもの。

18) カセットテープを歩きながら聴ける再生装置。

19) 野島（1979）では「青年労働者」との言い換えがあり、「青年世代」とは職業に従事する年代層を広く指す用語として使用されている。

20) カラオケの歴史については全国カラオケ事業者協会がホームページに掲載する歴史年表とその解説を参考にした。

〈<http://www.japan-karaoke.com/03nenpyo/index.html>、http://www.japan-karaoke.com/03nenpyo/03_02.html〉（2010年10月5日）

市場が拡大し、1980年代後半からカラオケボックスが普及した。現在のような通信カラオケが普及するのは、本稿の調査対象後の1992年のことである。

しかし、通信カラオケをまつまでも無く、1970年代後半からの家庭用カラオケによる利用者拡大と、1980年代に広まった「映像カラオケ」による歌詞の提示という現象によって、歌謡曲の歌詞に対する意識変化が生じたと思われる。

鼻うたのような歌い方や、歌を聴けば意識せずとも何となく歌っている、ということはそれ以前にもあっただろう。しかし、1970年代後半になって伴奏に合わせて歌う「カラオケ」という行為が広まった。それは、歌を歌詞通りに歌うという行為であり、歌い手であり視聴者である人々（その一部には番組制作者を含む）に「正しい歌詞を知りたい（知らせたい）」、「歌詞の一字一句を見たい（見せたい）」という意識を形成させたと考えられる。歌詞を提示する文字テロップの発現は、こうした時代の要請だったと言えるだろう。

8. まとめ

以上、1960年代から1980年代までの歌番組「紅白歌合戦」を資料に、その文字テロップを調査した。その結果、次の4点は1960年代から変わらず確認することが出来た。

- (1) 番組の枠組み；①撮影場所、②会場名、③番組タイトル
- (2) 出演者の情報；①審査委員、②司会者、③歌手
- (3) 歌の情報；①歌手（上記と重複）、②歌のタイトル
- (4) 勝敗の結果；①〇組優勝

そして、1982年に放送された第33回から次の1点が加わる。

- (5) 歌の情報；③歌の歌詞

この変化について、歌謡曲のジャンルが増えたこと、カセットテープとCD普及によって歌謡曲が浸透していったこと、カラオケによって歌詞通りに歌う行為が広まったことという3点から、「歌詞提示」を欲する意識形成があったのではないかと考察した。技術革新が起こり、その技術革新が意識

を変えていくことによって、歌詞がテレビ画面に提示される必要性が生じたのだと考えられる。

以上、本稿の考察から、時代が進み、技術が進むなかで、人々の意識が変わり、文字テロップが質的变化を要請される、という可能性を示唆することが出来たと思う。

付記：本稿は「NHK アーカイブスの学術利用に向けたトライアル研究」における成果の一部です。

参考文献

NHK 放送文化研究所（2003）『テレビ視聴の50年』日本放送出版協会

NHK 放送世論調査所（1983）『テレビ視聴の30年』日本放送出版協会

菊池清麿（2008）『日本流行歌変遷史』論創社

倉田喜弘（2006）『日本レコード文化史』岩波書店

設楽 馨（2005）「バラエティ番組35種における文字テロップ」『かほよとり

第13号』武庫川女子大学大学院文学研究科国語国文学専攻院生研究会

野島正也（1979）「『ひがみ』の社会心理学的考察—『街はばれえど』」『現代歌謡の社会学』副田義也編 日本工業新聞社

2010年11月1日 印刷
2010年11月10日 発行

編 集 者

武庫川女子大学
言語文化研究所

発 行 者

武庫川女子大学
西宮市池開町6番46号

(非 売 品)

印 刷 所

大和出版印刷株式会社
神戸市東灘区向洋町東2-7-2